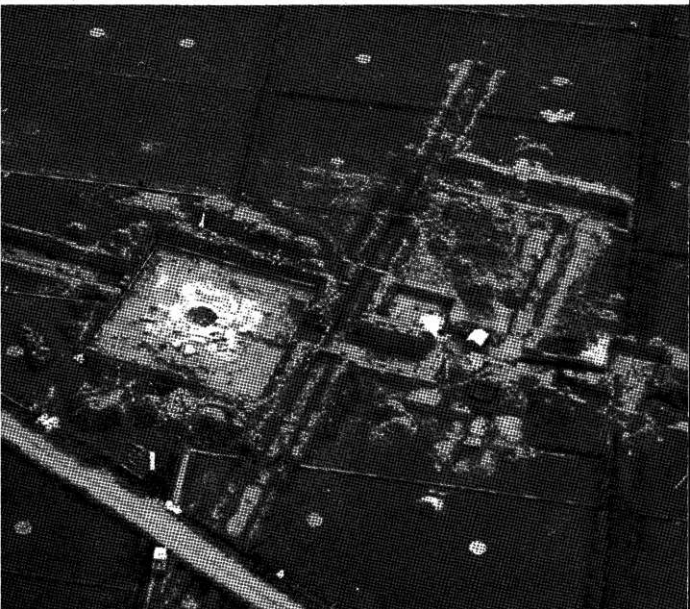


史 跡

末松廃寺



石川県野々市町教育委員会・末松廃寺調査団

発刊によせて



鎮入れをする中島町長

よほど遠い大昔のことか、この雪深い越の国に大寺院が建造されていたようである。どこからどうして運ばれたのか巨大な唐戸石の塔心礎をはじめ古瓦や土器類が無数に出ている。

ところがそのことについての確かな文献がないことから末松部落の人びとはこの不思議な千古の謎の解明に心を注ぎ、情熱を傾け幾年も各界に対し調査を嘆願し続けてこられたのであった。

昭和12年によくこの道の識者上田、鍋木両氏の一部調査によって非常に重要な古代寺院の跡であることがわかり、14年に国の重要史跡として指定をうけるに至った。

ところが昭和三十六年六月この寺院の護り神と呼ばれた高村氏が、たまたま田んぼの水廻りの途路に日本最古の「和銅開承」を発見されたことから、1250年以前この地に古へびとの住みしこと明らかとなり、再び学界の深い関心を引き起こすことになったのである。

ご承知のように、近年、全国的に地域産業の開発が進められている。そのために地下に埋れた貴重な文化的史跡が到るところで破壊されている。この寺跡も例外なくそうした事態にあったことから早速国や県に対し祖先の尊い遺産の顕彰を申し出たところ、幸い積極的な協力援助を得ることになったので大いに意を強くし、指定地の全域を史跡公園化することに腹を決めたのである。

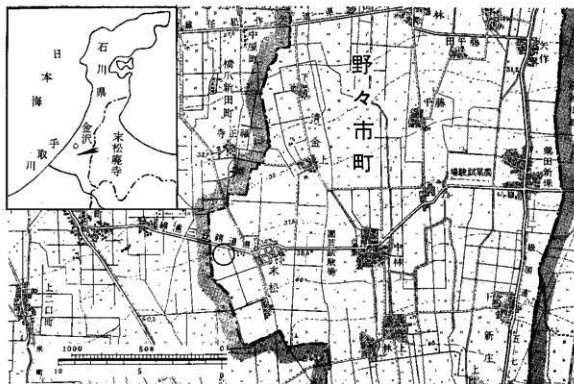
こうして昨41年は予備調査が行なわれたところ意外にも昭和12年の調査資料より遥かに大規模な寺院であることが立証された。したがって今年の本格調査によせる期待はより大きく、調査に当る関係機関や考古学の諸賢に対し心から敬意を表したいと思う。

加賀原状地平野の真中に望峰白山を仰ぎ見て千有余年前に築かれたこの大寺院は、越の国北陸一帯の大文化圏を構成していたようにも想像し、感動の高鳴るを覚えるのである。遠い祖先のこうした偉大なる業績は私どもの誇りうる遺産であると共に、現代から後世へ生きた歴史の教材として立派に顕彰することこそ、当然果さねばならぬ使命と考える次第である。

昭和46年10月

史跡末松庵寺址予備発掘調査事業運営委員長
全国史蹟整備市町村協議会副会長

野々市町長 中島 栄治



末松廃寺付近地形図（2万5千分の1「松任」分載）

遺跡の環境

位置 霊峰白山に源を発する手取川は、加賀山地を北に流れて日本海にそそぎ、流程約70Kmにおよぶ石川県下最大の河川である。末松廃寺は、手取川の開析作用によって造成された半径約20Kmにわたる標式的扇状地の扇央東辺の一角をしめ、標高約38mをはかる。近世に北陸道にそう宿場町として発展をとげた野々市町は、この東北約4Kmにあり、現在廃寺の周辺は、明治年間全国にさがけて実施をみた耕地整理事業によってあますところなく美田地帯として開拓がゆきとどき、加賀穀倉地帯の中心となっている。

環境 野々市町北端の微高地に位置する御経塚遺跡は、北陸における縄文時代晩期前半の代表的な遺跡として広く知られているがこれにつづく弥生・古墳時代の遺跡はほとんど確かめられていない。しかし、律令時代をむかえると本寺をふくむ中村、富樫阿用水の間にはさまれた高燥地の開発が急速にすすんだようである。和名抄にみえる押師（林）郷にあたる野々市町上林付近では、南北朝時代まで条里制の呼称にもとずいて土地の坪付をおこなっていたことが「三宮記」におさめる土地寄進状に記されている。また、廃寺の西北約2Kmをへだてた県立松任農業高等学校地内には、近年緊急発掘をおこない古墳前期から平安後期にいたる複合集落遺跡が顕現された三浦遺跡があって、旧図からは条里制水田の遺構をうかがうことができる。これらの遺跡は、手取扇状地の開拓史を段階的に整理してゆくうえで重要な意味をもつ。

なお、この一帯が扇央部でありながら比較的早期に可耕地化された理由としては、洪水の被害をこうむりにくいという条件のほか、灌漑の問題を考慮しなければならず、地質・地理学の立場からも精密な調査がまたれる。

既往の調査 と保護運動

前史 末松部落西方の水田中に、古来「カ
ラト石」とよばれる巨石がすえられ、瓦器類の
出土をみることはかなり以前から知られていた
ようである。藩政末期の史学者津田鳳卿の『石
川訪古遊記』には、延5、60人の人がこれを掘
りおこし金沢の本願寺別院へ運ぼうとしてはた
さなかったという見聞記をのせている。心礎は
明治21年、村人が大兄八幡神社の洗鉢として移
転奉納し現在にいたっているが、明治44年に着
手された耕地整理事業の際に付近より土器類が
出土したことも、古代の謎の石に対する関心を
助長したようである。

昭和12年度の調査 昭和11年、たまたま飛騨
国分寺の心礎を実見した高村誠孝氏らは、堀村
後、末松の古代遺跡を加賀国分寺と想定し調査
を立案した。かくて、鏡木勢岐（金沢第1中学
校教諭）・平岡栄雄（若宮八幡社々司）の指導
のもとに昭和12年3月12日から15日まで瓦散布
地の発掘をおこない、金堂基壇の石敷、ついで
塔礎石の根石群を発見した。報をうけ3月下旬
には文部技官上田三平氏が来県し現地踏査の結
果、約12.7×10.6mの石敷部分を金堂、その東

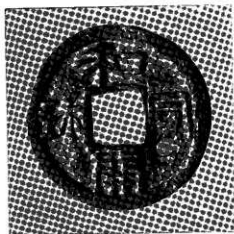


史跡の標柱と高村誠孝さん

約18mをへだてて一辺約9mの塔址をそなえた
伽藍構成を確認するとともに、瓦当文様より奈
良末ないし平安初期の年代観を与えられた。

史蹟指定 昭和12年度の調査を契機に地元で
は末松廃寺保存会の結成をみ、同年8月にはは
やくも小林千太郎宮奥村長より安井英二文部大
臣宛に史蹟指定の申請書が提出され、昭和14年
9月7日には文部省告示第410号により秋田城
址などと同時に史蹟指定をうけた。その後も、
高村さんを中心とする村民一体の献身的奉仕に
よって戦中、戦後の混乱期にも荒廃をまぬがれ
たのであった。

昭和38年度の調査 戦後、歴史学が神話から
解放される思潮のなかで著しい進展をとげた考
古学は、官衙・寺院の研究についてもつぎつぎ
に新知見を提供した。そして昭和36年春、高村
さんが偶然金堂西側の瓦層上と推定される用水
路から銀銭と銅開珎を採集したのが機縁となっ
て、本寺は再び衆目をあつめることになった。
おりから、廃寺の北方を縦貫する県道額谷一三
浦線の拡張工事計画が内示されたので、調査の
依頼をうけた石川考古学研究会が、昭和38年秋
松任農業高等学校の協力をえて、遺跡全域の地
形測量とボーリング調査をおこない、とくに金
堂址と塔址の規模と配置の相互関係について検
証を試みた。その結果、昭和12年度の略測図と
齟齬を生じ、かつ屋瓦様式からも従来の年代観
に疑問がもたれるようになり、地元でもこの機
会に廃寺の全面的調査を要望する機運が高まっ
た。

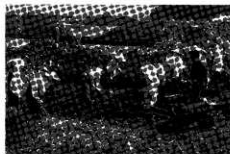


銀銭と銅開珎（径2.45cm 重4g）

調査の概要



中西知事の見学

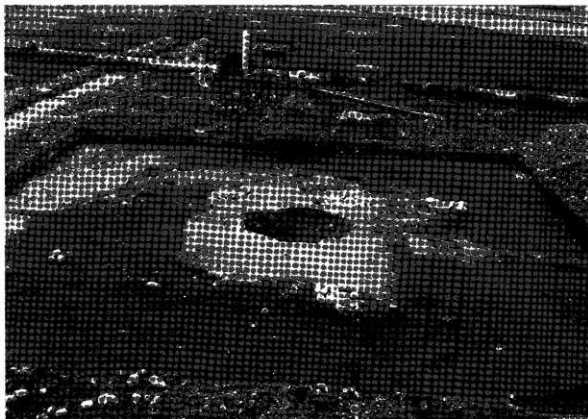


発掘風景

昭和38年の予備調査にもとづく調査計画は、文部省記念物譚三木彰補佐、坪井清足技官の現地踏査をへて史跡公園の構想に発展し、それを前提とする第1次調査が昭和41年9月23日より10月20日、第2次調査が翌42年7月21日より8月15日まで実施された。調査は、

- ① 寺院構造の總体的把握
- ② 条里制および集落遺跡との関連
- ③ 寺院建立の政治経済的背景の究明

を重点目標にすえ発掘をすすめた結果、塔址の全掘と金堂址の規模をとらえることができ、所期の目的を達成することができた。ただ、廻廊・南大門・中門・講堂については時間の制約をうけて確定するにいたらなかった。この間、発掘の対象とされた水田約2,000㎡(約600坪)、人夫延1,200人にのぼる。

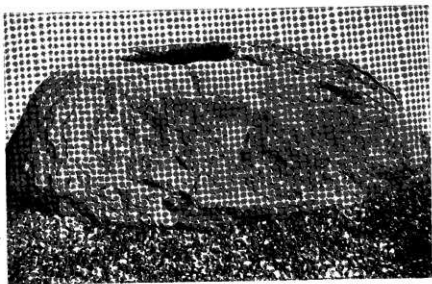


塔址金堂景(南より)

伽藍構 成

塔心礎

(長径224cm 短径165cm)
柱孔径58cm 深11cm



今回の調査では、これまでの研究によってその位置が明らかになっている塔と金堂の規模を知ることに重点をおき、その他の建物については予想される位置にトレンチをいれて、その存在を確認することにつとめた。以下その結果を簡単に紹介しよう。

塔 塔址については、全面的な発掘調査をおこなった。当初に予想していたよりも遺構の残存状況がわるく、その検出に困難をきわめた。ほぼその規模を明らかにすることができた。基壇は後世の破壊をうけて、その大半がけずりとられており、わずかに中央部付近に基壇土が残っているだけであった。しかしながらさいわいにも、残存していた基壇土上に、心礎抜穴と他の礎石根石を数箇所検出することができたので、塔建物の規模を知ることができたのである。

心礎は、その抜穴と他の礎石根石からみて、いわゆる地下式とよばれるものではなく、基壇上に露出していたものと思われる。この心礎は、明治のころまで現位置にすわっていたといわれるが、いまは末松部落の大兄八幡神社境内に移されている。それを見ると、平面形は長径2.24m、短径1.65mのほぼ楕円形をなし、上面に径約1mの平らな部分を作っている。そしてその平らな部分に径約60cm、深さ11cmの柱孔とも舍利孔ともみられる穴を穿っている。

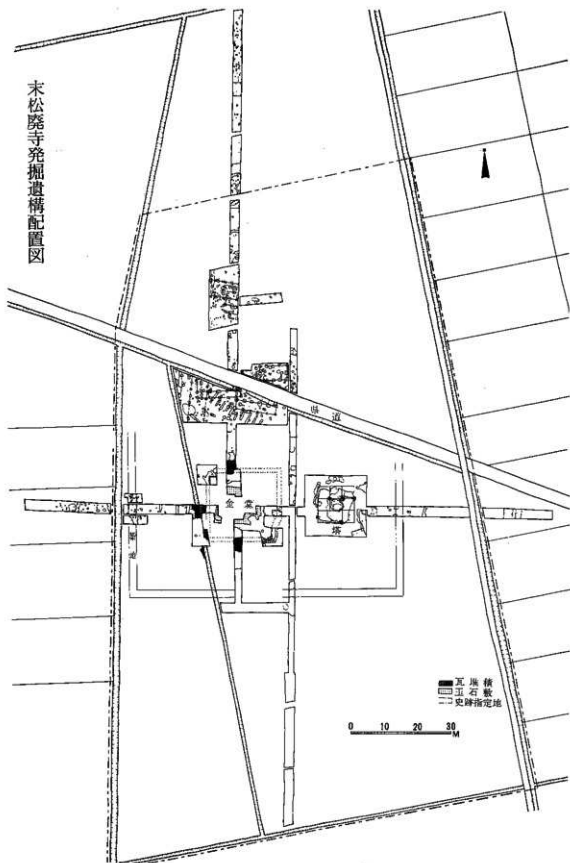
他の礎石はすべて抜きとられていたが、四天

柱北側列(根石番号1・2)と、東側柱列北より第2番目(根石番号3)・南側柱列東より第2番目(根石番号4)の計4本の柱位置で根石を検出した。これらの根石の心々距離は、1・2・3の間はいずれも3.6m(12尺)、2と4の間は7.2mであった。したがってこれらの根石の配置から塔建物の規模を考えると、この塔は三間等間で一辺が10.8m(36尺)となる。

基壇は前述したように破壊がはなはだしく、中央部にわずかな基壇土が残っていたのみであった。この部分を断ちわってその構築法を調べたところ、この基壇は掘りこみ基壇ではなく、地山の上に粘土を築き固めて盛り上げたものであることがわかった。基壇周縁部は徹底的に破壊され、地覆・雨落溝などの施設については、その痕跡すらも認められなかった。したがって基壇化粧はいうまでもなく、基壇の大きさ、高さなどについてはまったく不明である。ただ建物の規模からみて、この塔基壇の大きさは、一辺が13mでいどのものではなかったかと推測される。

なお塔址の調査中、基壇の東南隅にあたる部分で、塔創建以前と考えられる一辺3.6mの方形堅穴住居址を1基検出したことと、塔壊滅後に心礎をとりかこんで小さな礎石付建物が建てられたらしい痕跡が認められたことを付記しておこう。

末松廃寺発掘遺構配置図



金堂 金堂跡については、基壇上半部がすでに破壊されていて、建物の規模を明らかにすることができないことが予想されたので、もっぱら基壇の大きさを知ることにつとめた。また、調査日数の制約もあったので、基壇周縁部と思われる部分に5箇所トレンチをいれた。その結果各トレンチ内で、瓦堆積層を検出した。この瓦堆積層は、建物の倒壊によって基壇まわりに堆積したと思われる。5つのトレンチのうち3箇所で瓦堆積の下に、雨落溝と考えられる素掘りの溝（幅約1.8m）を検出した。この結果、瓦堆積層は溝の基壇側の縁より内に入らないことがわかった。したがって瓦堆積層の内

側の線を、基壇の端とみてもほぼまちがいはなかろう。このようにして金堂基壇の大きさを推測すると、それは東西21m、南北16.5mの東西に長いものとなる。基壇の化粧は今回の調査では、まったくみとめられなかった。基壇は掘りこみ基壇ではなく、塔と同様に地山上に粘土を盛りあげたものであった。ただ現在残存する基壇土上には、東西14m、南北10.5mの長方形をなして、約20cm大の玉石が一面に敷きつめられているのが塔とは異なる。この玉石敷はおそらく基壇土をかためるために用いられたものであろうが、どうして基壇全面におよばずに基壇辺の周縁の幅 3.5mをのぞいた中央部のみに敷きつめられている

ことが疑問視されてきたが、その方位が平安後期の建造物の一部と一致するため、金堂がこの時期に再建された可能性が強い。なお金堂基壇東端と塔推定基壇西端との間の距離は11mであった。



金堂址南方トレンチの
瓦堆積状況（南より）



金 堂 址 全 景（東南より）

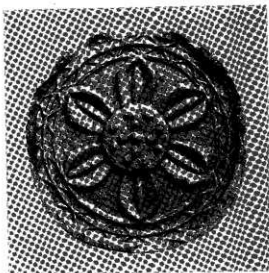
その他の建物 講堂、中門、廻廊の位置を確認するために、各所にトレンチをいれたが、後世の破壊がはなはだしく、講堂、中門については何の手掛りもうることができなかった。廻廊についても確かなものはえられなかった。ただ塔の東に東西にいたれたトレンチ内で、塔東側柱根石より東へ12.5mをへだてたところに、南北にならぶ2個の礎石根石を検出した。わずかに2個のみであるので断言はさしひかえるが、あるいは廻廊にかわる築地の一部であるのかもしれない。

以上で今回の調査結果の紹介を終るが、最後に若干の問題点をのべておきたい。まず注目されるのは、塔の規模が非常に大きなことである。出土遺物からみて末松庵寺の創建年代は奈良前期と思われるが、これまで知られている同時代のものとくらべると、官大寺は別としてその規模は他にあまり類例をみない。地方におい

てこの規模の塔が建てられるのは奈良後期になってからのことである。塔と比較すると金堂はさほど大きくないこと、また塔と金堂の間の距離が短かいことなども注目される。末松庵寺が、塔と金堂を東西に併置した南面する伽藍配置であったことは、今回の調査で明らかになった。しかしながら上に述べた問題点が、その他の諸堂の不明な点とあいまって、伽藍構成に大きな疑問を投げかけている。これらの問題点を解決するためにも、今後における徹底的な発掘調査がのぞまれるのである。

出土遺物

上 単弁糸蓮華文軒丸瓦 (面径16.8cm)



下 複弁糸蓮華文軒丸瓦 (塔址東南隅出土)



瓦と土器 今次の調査で塔址近辺より出土する瓦が意外に少なかったことが調査員の注意をひいたが、二次的の撓乱によるものか、創建時の特殊な事情によるものかつまびらかでない。これに対し金堂址の四周にもうけたトレンチからは、基壇縁辺の雨落溝と考えてよい凹地形掘込みにそって瓦層が検出された。

軒丸瓦は、既往の調査により確かめられていた13の蓮子を入れた中房に六葉蓮華文を配し、周縁を複合鋸歯文で加飾したものほか、川原寺式に属する複弁系の瓦当片が1点、塔址の東南隅にあたる表土中より出土したが意味不明である。従来、単弁系軒丸瓦と対をなす軒平瓦が確認されず疑問とされてきたが、厚手の平瓦の両隅を方形に切りとって軒丸瓦との接着を容易にするよう加工したものをういていたことが明らかにされた。平瓦は長約40cm、幅約30cm、厚約2.5cm程度が普通であって、幅3cmばかりの小板を連繋した円錐台形の桶を母型とした4

枚づくりのもので、表面には鮮明な糸切り痕と布目痕、裏面には格子状の叩目をとどめている。なお、鴟尾の一部かと推定される軟質の瓦片が1点、金堂南の雨落溝中より発見された。屋瓦はこのように1様式にかざられ、修復の証跡がみつめられない。

瓦層中に混入して出土した土器はいずれも小片であって、寺院の創建あるいは存続年代を決定するような資料は発見されていない。ただ、昭和12年度の調査で金堂址から出土したという脚部に円孔をうがった高杯の精品は、当地では類例をみないもので、8世紀中葉を下ることはないと判断される。

創建年代 今次の調査で塔、金堂の規模が予想外に大きく、とくに塔は国分寺級の七重塔を想定せねばならず、これにかぎっていえば奈良朝後期（8世紀後半）の年代をあたえるのが妥当であろう。しかしながら、軒九瓦の文様構成および軒平瓦の様相は奈良朝前期（7世紀末～8世紀前半）を下るものではない。ここに至る異質の二要素は、究極において文化事象の地域性として統一的に理解されねばならぬものであるが、金沢市館山瓦窯址のように典型的な天平様式の瓦出土例が知られているので、奈良朝前期に落ちつく可能性が大きい。そのばあい、福井県武生市野々宮廃寺、石川県加賀市保賀廃寺などの複弁系軒九瓦と本寺のほか加賀市忌浪廃寺から出土している単弁系軒九瓦の関係も、慎重に検討する必要がある。

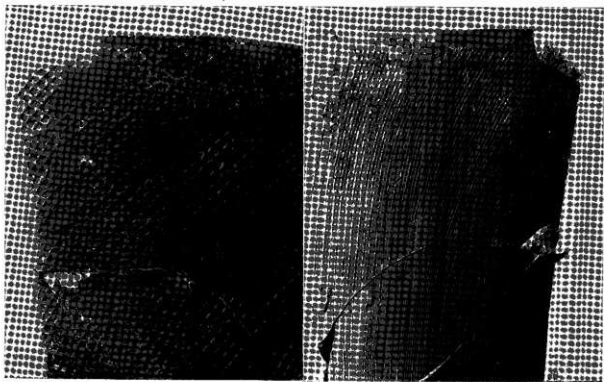
寺院と豪族 ところでこの寺院が8世紀前半を下らぬ時期に建立されたとすれば、それに先行する7世紀代すでに周辺の開発がかなりすすんでいたと考えねばならない。最近浅香年木氏が発表された天平3年（731）の越前国正税帳



須恵器高杯（金堂址出土 縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

の分析結果でもこのことが指摘されているが、集落址の考古学的調査ではこれを裏付けるにいたらない。反面、寺院の存続時間がきわめて短かったことは、寺院の位置と集落が離れており、したがって廃寺化は開発の挫折とみることもできる。

越前国正税帳には、当時の越前国加賀郡の郡司として道君五百島、同安麻呂、大私造上麻呂、九部臣人麻呂の名がみえる。このうち道君一族は古墳時代以来の豪族であり、大私造、九部臣はいずれも大和朝廷とそれを構成する有力氏族が北陸へ進出する過程で服属し、郡民管理者となった土着あるいは外来の政治勢力である。本寺の建立者に道君をあてることは一応妥当であるが、この一族の本貫や加賀郡々家が不明な現状では即断を許さない。



軒平瓦（右表面 左裏面）

末松廃寺前後の遺跡

末松は、早く縄文時代晩期（B.C1000～500年頃）に先住民が住みついていたことが耕地整理の際出土した多数の打製石斧によって知られ、その後、周辺地帯の開拓が急速にすすんだ古墳時代前期（4世紀代）以降奈良時代まで、ほぼ継続して農耕集落が営まれていたことが判明している。さらに、本寺の廃絶後古代末期から中世初期にかけても寺域に建造物や宗教関係の遺構がもうけられている。その意味では、本寺の前後につづられた末松の歴史は、手取扇状地開拓史の縮図ともいえる。

古墳期の竪穴住居址 塔址東南隅より創建以前にはりくぼめられた、一辺約3.6mの方形を呈する竪穴住居址の過半が姿をあらわした。床は火災にあって真赤に焼けており、床面にのこっていた土師器から古墳時代前期の住居址と推定された。

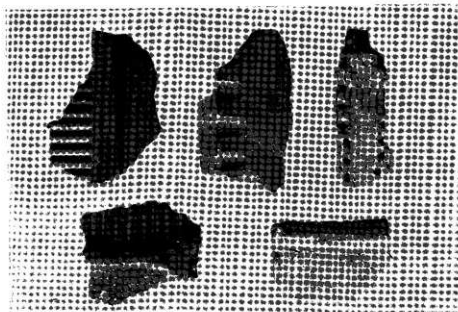
平安後期の建築遺構 すでに第1次調査によって、堂塔と重複して11世紀代の小礎石群や用水路が確認されていたが、第2次調査の結果、寺域の北方で掘立柱建物5棟とこれに付属する鍛冶関係の生産遺構が次々に検出され、寺院荒廃の事情についてもある程度の推測が可能になった。

台付長頸瓶（金堂西偏水田出土）



掘立柱建築址一覽表

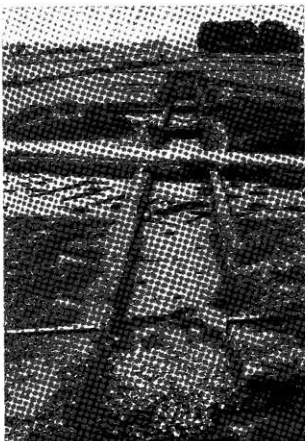
番号	東間 (柱間)	桁行 (柱間)	庇 (広)	方位
1	5間 (2.4m=8尺)	未詳	南庇 (2.7m=9尺)	N11°E
2	4間 (2.4m=8尺)	2間 (2.4m=8尺)	四面庇 東西1.5m 南北1.8m	N 4°W
3	4間 (1.8m=6尺)	2間 (1.8m=6尺)		N 1°W
4	4間以上 (2.4m=8尺)	2間 (2.4m=8尺)		N10°E



瓦 塔

(相輪・屋蓋・基壇、

平安後期)

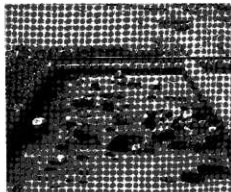


寺域北方の掘立柱建物群

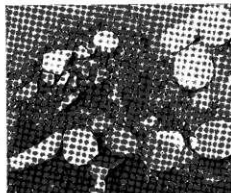
掘立柱建物はすべて平安後期に所属する。規模・構造は図示したとおり、講堂想定地区で検出された①②の主要部分が道路敷の下に埋没し、①の北方約30mの僧房想定地区の④⑤も完掘できなかったので全貌をとらえることはできなかったが、瓦葺でなかったことは確かである。これらにともなって、土師器の碗・皿、須恵器の瓶・甕、遠く東海ないし中部山岳地域からもちこまれた灰釉土器、寺地で供養塔として使用されたかと思われる塗彩された土師質瓦塔、鉄釘類が出土している。

また、掘立柱建物④の一角で発見された炉跡は、建物廃絶後の遺構で略円形を呈し、径約2mを測る。掘鉢状の土坑内から木炭・焼土に混じって多量の鉾針と轆口、土師器が出土し、平安後期の製錬場と考えられる。

これらの掘立柱建物群は同時に存在したものではないが、一般農民の住居と著しい格差をもつ特定階層の所産であることは間違いない。11—12世紀は、律令政府の公権を背景とする国家



僧房想定地の建物と銀治遺構



土師器の出土状態

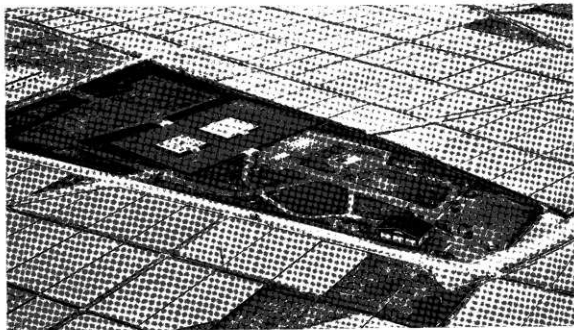
的開発がゆきずまり、荒廃化した条里制水田を開発領主とよばれた武士たちが再開発にとりくんだ段階であり、おそらく末松廃寺の堂塔が創建時の面影をとどめぬほどに破壊されたのもこの時期であつたろう。このことから、奈良朝の堂塔廃棄後、末松が新興の林一族に代表される武士勢力の扇状部支配の拠点となったことは明らかである。ただ、建物の性格については、建物の大半と金堂石敷部分の方位が一致することから、金堂が規模を縮小して再建された可能性が大きいものの、なお全てが寺院のような宗教的建築物なのか、通常の居宅なのかは検討の余地がのこされている。

鎌倉期の宗教遺構 昭和38年度から今次の調査にかけて、金堂南方の敷石をぬきとって、一辺1m内外の方錐状に円礫を積みあげた遺構が3基発見された。円礫をとりぞくと、下に多数の完形の土師質皿が納置してあることから、鎌倉前期頃の墳墓あるいは供養塚のような遺構と考えられる。

まとめ

末松庵寺は、奈良朝前期、すなわち律令制集権国家が完成する8世紀初期を下らぬ時期に建立され、いわゆる法起寺式伽藍配置をとっていたことが確定した。ただ、堂塔以外の寺院建築が実在したという積極的な証明がえられなかったことは、地方寺院としての一般的な制約によるものか、あるいは建立の推進者と目される郡司道君一族をめぐる政治事情にかかわるのか明らかでない。また、寺院をとりまく律令村落の様態や地方色豊かな屋瓦を供給した窯址の探索など、今後にのこされた課題も多いが、北陸で全面調査の実施された最初の寺院址として、永く記憶されるであろう。

そして、全国有数の荒廃河川にかざえられる手取扇状地の多難な開発ととりくんだ豪族と幾多の住民の壮大な記念碑ともいえる本庵寺が、各種の地域開発の進行にともなって多くの文化遺産が失われつつある現状で、周到な準備のもとに学術調査が行われ、ひきつづき昭和45年度までに史跡公園としての整備を完了したことは、きわめて重要な現代史的意義をもつと考えられる。それは、学術資料の永久保存を通して広く歴史教育の場を提供し、緑地として解放されることで地域の財産として還元されるだけでなく、石川県の遺跡保存に一つの足場をきずいた点で、今後の文化財行政にあたえる影響はまことに大きいといわねばならない。



史跡公園末松庵寺の全景(東北上空より)

末松廃寺調査事業運営委員会

顧問	石川	知事	中西	陽貞	一夫
	文化財保護委員会	記念物課長	中任	西田	雄義
	石川県教育委員会	教育課長	石中	浦島	隆治
委員長	野々市町	議長	竹園	内田	保太
副委員長	野々市町	教育委員	中	田	哲
委員(事務局長)	石川県教育委員会	社会教育課長	中	田	策
委員	野々市町教育委員会	社会教育課長	中	田	清
	石川会教課文	文化財係	河	村	貞
	石川会教課文	文化財係	渡	辺	男
	野々市町文化財	委員	松	村	孝
	末松有	志	高	村	昭
	野々市町教育委員会	社会教育課主事	増	山	

発掘調査団

顧問	秋下	田出	喜積	一与	石川考古学研究会	長
調査団長	鏡	木井	勢清	岐足	金沢大	学教授
調査指導員	坪井	井原	正純	道一	県文化財	専門委員
	亀河	村田	晃茂	弘一	文化財	調査官
	岡村	上原	認武	一二	同	技官
調査主任	藤高	堀岡	勝賢	喜太郎	同	上
調査員	浜金	山本	顯澄	光夫	同	上
	桶吉	岡香	康年	暢木	同	上
	浅井	保嶋	明嘉	人章	同	上
調査参加者	古田	嶋邦	弘一	同	同	上
	副	末松	部	落	同	上
		石川	県立	松任	農業	高等学校
						地歴部

(石川考古学研究会顧問)

(石川考古学研究会代表幹事)

(石川考古学研究会(員))

(石川考古学研究会(員))

(石川考古学研究会(員))

(石川考古学研究会(員))



史跡末松庵寺

発行日 昭和46年10月11日

発行者 石川県石川郡野々市町教育
委員会・末松庵寺調査団

編集 高畑勝喜・金山顕光

執筆 河原純之（「伽藍構成」の
項） 吉岡康暢（その他の
項）

印刷者 北国書籍印刷株式会社

（昭和59年10月復刻）